

曹洞俳壇

選・坊城 俊樹

夜桜のすゑおそろしき心かな

埼玉県 尾内 達也

評 「夜桜」は昼の桜とは異なる印象がある。それには花の心が爛々と満ちているようであり、妖艶で誘惑されるような情をも感じる。それを「おそろしき心」と形容した作者の感性に共感するばかりである。

春岬天上天下青ばかり

三重県 劫屋奈良美

評 春の岬には紺碧の海や青い空、そして草木なども緑の色を濃くしている。それら、天上の世界と地上の世界すべてが青に埋め尽くされたという感動の句である。それもまた、すべて仏教の世界に通じるのかもしれない。

◆兜太逝き津々浦々の田螺鳴く

島根県 藤江 堯

◆影法師乗せて漂う花筏

神奈川県 堀田 耕一

◆坂東の瀬よりもはやし花吹雪

群馬県 山本 俊久

◆荷台から牛の顔出す春の雨

静岡県 石濱 徹

◆ハンカチの花ゆらし行く風の径

埼玉県 橋本 永子

◆菜の花の黄色き海に兎は飛びて

滋賀県 三田 和子

◆卒業のはかま姿で空仰ぐ

東京都 斉藤ハルエ

◆散る桜古人の闇を灯すべく

埼玉県 鈴木まさゑ

◆体操の庭を横切る初つばめ

静岡県 島田 イネ

◆休憩も無くて春田のラジオかな

福島県 佐藤 忠

*選者吟

眼裏の春の海にて父と逢ふ

俊 樹

*作句小見

父の命日のころ、現実の春の海を見ていたら、過去に父に連れられて行った春の海を思い出した。しかし、その景色は茫洋としてはつきりと思いつけない。残っているのはそのときの父の声や表情ばかりなのである。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

日照りにはかつて田水で諍いし人とあらば
しり飲み農を語りぬ

三重県 西村 廣視

評 その年、収穫した米で作られ、最初に搾り出される酒を「あらばしり」と言うらしい。いかにも勢いのある語で一首の要になる。田に引く水で諍いのあった彼とも、この酒ゆえに農業の未来を語り合えるのだ。日本の良き文化を感じさせる。

窓よりも少し大きなカーテンで白雲捕え大
きく包む

新潟県 星野 三興

評 窓の向こうに見える雲をカーテンで包むという発想が、いかにもユニークで楽しい。のどかな季節感と作者の明るく浮き立つ気分とがうまくマッチしている。

◆ 献体の役目を終えし母の遺骨抱きて来たる春の山寺
◆ 入選の願ひを込めた春の空全ての雲が音符に見える

福岡県 松本 享子

青森県 中田 瑞穂

◆ むかひ陽に顔うつむけて庭ゆけばほのかに匂ふ春の黒土

山口県 中井 清子

◆ 今朝の空不機嫌だから傘持つて行くといふ妻詩人のごとし

秋田県 小田嶋恭葉

◆ 病室の窓の向かいの竹林にいつもの猫が様子見に来る

東京都 野村 信廣

◆ 今はもう遊ぶ子ら無き学び舎に尊徳ぼつりひとりごと言

岩手県 熊谷美智子

◆ 白寿近く鍬振り出来る幸よ神と医療のただ有難し

福島県 西木 甚

◆ 公園にうぐいすの声冴え渡りグランドゴルフのプレー中

静岡県 高尾 善五

◆ 防砂林のはざまに見ゆる外房の海原青し浜より高く

千葉県 富野光太郎

◆ 琉球の小鳥高らに笛を吹き旅の二日の我に告げく

秋田県 小松 紀子

* 選者詠

夭折の妹いたむ川の歌にさくら色した付箋
を添えぬ

ちづ

* 作歌小見

やや停滞気味だった冬の季節から、春を迎え活動的になられたか歌材が豊富で秀歌が多く、今月は選歌に迷いました。春の黒土の匂いを捉えた中井さんの感覚、琉球の小鳥に笛を吹かせた小松さんの旅心、富野さんの視点にも惹かれました。



大本山永平寺



白山拝登

はくさんはいとう

盛夏の中、深山の大樹の影に坐する永平寺は、涼やかな川の音に包まれています。

永平寺では毎年七月に、日本三名山に数えられる「白山」に拝登致します。白山は、泰澄たいさう大師さまが開山してから、昨年で一三〇〇年を迎えました。また、その主神である「白山妙理大権現はくさんみょうりだいてん」は、道元禅師さまが中国から帰られる際にお助けくださったという説話があり、修行僧の修道無難を祈る掛け軸に、その名が書かれます。

道元禅師さまはこんな一首を詠まれています。

「山深み 峯にも尾にも こゑたてて けふもくれぬと 日
くらしそなく」

考えてみますと、この一日一日は振り返ることはできても、二度と訪れることはありません。食事をしてでも便所に行っても何をしても命がけ、命がけで生きようとしなくても、命がけなのです。この二度とない一日一日を、ひぐらしが「今日も暮れるぞ！」と何度も何度も教えてくれている様です。

山の頂きは雲の上。まだまだたどり着かない道のりを足元だけを見て進む中で、ふと足を止めて振り返りますと、あっという間に中腹まで来ていることに気がつきました。この一息一息を、修行の道場とみて、我ある処は他になし、と一心に修行したいものであります。

ご本山だより



大本山總持寺



總持寺のお盆

總持寺では七月にお盆を迎え、一日より十一日まで施食会法要せじきえが毎日行われます。特に八日（日）には江川禪師さまが大導師を勤められ、広い大祖堂だいそどうが参詣者で埋め尽くされます。

十二日より十五日は棚経の期間となり、檀信徒のご自宅へ本山の僧侶が訪れ、お盆の供養をいたします。

こうした一連の行持ぎあしが終わりますと、十七日より十九日まで「み霊祭り納涼盆踊り大会」が行われます。

今年で七十一回目となるこの行持は、戦時中に横浜大空襲で亡くなられた大勢の市民と鶴見鉄道事故の犠牲者を慰霊するために始められました。現在は東日本大震災や国内外被災者の供養も修されており、毎年延べ三万人を超える来場者があります。

み霊祭りを通じて、總持寺を訪れる多くの人々に親しみを持つて頂くことはとても大きな意味があり、地元の方々との地域交流にもつながっております。

また仏殿参道や平成救世観音周辺に多数の灯明とうみょうが供えられる「万灯会供養まんとうえくよう」も行われます。ご先祖さまや親しきみ霊へご供養の灯明を並べ、お盆の迎え火・送り火としたもので、境内に幽玄な雰囲気醸し出してあります。

大本山總持寺／045-581-6021